最終報告書

（報告期間2021 年8月22日～2021年12 月28 日）

基本情報

氏名：畑中直人（国際ロータリー第2710 地区2020-2021年度地区補助金奨学生）
派遣クラブ：三次ロータリークラブ
カウンセラー：前田茂様
受入クラブ：Rotary Club of Bordeaux
カウンセラー：Ms. Danièle Faivre
教育機関：ボルドー・モンテーニュ大学
Bordeaux Montaigne University
専攻分野：アフリカダイナミクスに関する学際的研究
Master Interdisciplinary Studies of African Dynamics (MIDAF)

目次

1. 学業面での成果
2. 受け入れ地区でのロータリーとの関わり
3. 直面した課題、問題点等　(3. 生活面)
4. 今後の課題、キャリア目標
5. 今後のロータリー活動への参加
6. 今後の奨学生への助言
7. その他特記事項

1. 学業面での成果

11 月上旬に修士論文を提出し、下旬に口頭試問を受けました。12 月 17 日に教授会が開かれ修士課程を正式に修了できることになりました。コロナ感染症の影響で終了時期が通常より 3 ヶ月程度延長になりましたが、今月晴れて卒業できることになりました。論文は秀の評価をいただき、修士課程を有終の美で終えることができました。

修士論文では、以前の報告書で紹介したインターンの研究で得られた知見と経験を基に執筆しました。論文のタイトルは、「*Les enjeux de sécurisation foncière pour les petits exploitants agricoles à l'Est de République démocratique du Congo : rôles et stratégies de la société civile comme acteur de la transformation sociale*（コンゴ民主共和国東部における小農の土地権利の問題：社会変革の担い手としての市民社会の役割と戦略）」です。この論文を通じてコンゴ民主共和国（以降コンゴ民）東部の、紛争や暴力の勃発と土地との関係性、土地権利保障の問題、土地をめぐる対立や紛争における異なるアクターの力関係について、土地問題の解決や土地のガバナンスの改革のための、市民社会のアクターの役割について書きました。

インターンで作成したレポートから考察し、市民社会による土地問題への介入が上手くいかない理由を仮説として 2 つ立てました。1 つ目は、合法性と正当性の差異を解消する（土地法の）改革が実施されていないこと、2 つ目はアイデンティティーの枠組みを越えた解決策が限られていることです。論文を執筆しこの 2 つの仮説が正しいことが証明されました。土地問題はコンゴ民の歴史的に根深い社会・政治的な問題と密接に関わっており、土地をめぐる対立・紛争が展開するレベルの多様さ（個人間レベル、コミュニティ（間）レベル、地方レベル、国レベル、隣国間レベル）や、地方の権威獲得及び天然資源獲得のための闘争があり、関係するステイクホルダーが複雑に絡んでいることが明らかになりました。他方で土地システムの「近代化」における問題や、現在における慣習的な規範と慣習チーフの重要性について学びました。

伝統的に農村部の多くの住民は、慣習的な規範に基づいて土地にアクセスし、利用しており、慣習的チーフが管理しています。チーフにより土地の情報が口承され、土地の権利はコミュニティの中で適応される集団的なものです。しかしながら1973年に公布され現在も有効な土地法では、国の全ての土地は政府の所有物であり、行政機関で土地を登記し個人が土地をコンセッションという形で利用できるという体制になりました。ところが改革の不実施により慣習的な土地についての規定は依然として定まっておらず、加えて行政がきちんと機能していないことで、慣習法と成分法の二分法が常態化しています。

慣習法に基づく土地体制は、植民地時代に農地開拓の一環で実施された移民政策、独立後の一連の土地改革の影響、社会変化により不安定になっています。土地利用の違い（牧畜/農作）による土地をめぐる競争の激化、移民（コミュニティ外の人間）を含めた人口増加、武力紛争の影響等により、1 人あたりの耕作可能地の減少や、口承による土地配分が上手くいかないこと、元いた土地を手放すなどの結果を招き、慣習法そのものの価値やあり方が疑問視されています。またチーフ自身も、慣習的土地の権利保障体制を危うくしている要因を作っています。二分法における曖昧な立場を逆手に取り、自分たちの権利や特権を維持している場合があったり、政治家や、武装集団などのアクターに利用されることで本来の役目から逸脱した行動をとったりしています。

司法分野においても慣習的なものから、フォーマルなものへの改革が進んでいますが課題が多く残

っています。プロセスの不透明さや長さ、腐敗した体制であること、現地の状況を考慮しない判決により、紛争激化の原因になっている場合も珍しくありません。反対にチーフは、その土地についてよく知り、住民から一定以上の社会的な信頼を寄せられているため超法規的機関として土地紛争解決に貢献しています。このように農村部において、法的な土地の保障権利は、正当だとみなされている慣習法による社会的な認証がある時に、承認され保証されるといった差異が生じています。

特にコミュニティレベルにおいては、民族アイデンティティーは市民権、国籍問題、慣習に基づく土地のアクセスの権利問題に結びつき民族間の紛争の火種になることもあります。しかしながら、土地紛争と民族紛争を単純に結びつけるのではなく、暴力や紛争の勃発やエスカレートに隠された、政治的、社会的、経済的な背景を注視する必要があります。

紛争解決には、中央政権が効果のある土地政策の実施だけでなく、ガバナンスの強化が重要です。しかし上述したように、政権の権威の脆弱な現状では、政府単体での土地のガバナンスや統治、正当性の問題解決は難しく、慣習も依然として重要な役割を担っているため、現代の土地体制と慣習的な体制を調和することが望ましいといえます。そのためには法的多元性という前提のもと、コミュニティごとの土地利用の規範や慣習、土地ガバナンスを担う機関の多様性を考慮しながら、民族の垣根を越えた参加的かつ地方分権的なガバナンスを実施する必要があるとの結論に至りました。その実現には、現地の市民社会のプラグマティズムなアプローチと、現地の実情についての分析を継続的に行い、その分析結果を全てのステイクホルダーと共有する必要性が明らかになりました。本論文は、地域住民のニーズに直接裨益する支援の方法を考察する大変良い機会になりました。

2. 受け入れ地区でのロータリーとの関わり

前回の昼食会以降、参加したロータリー活動はありません。来年 1 月 5 日にボルドークラブの新年会に招待していただいていますが、コロナの状況がまた悪化しているので中止になるかもしれません。

3. 直面した課題、問題点等

修士論文を仏語で 80 ページ以上書くことに苦労しました。これほど長い文章を書くのは人生初だったので、書けるのか心配でした。しかしながら、インターン先の元上司や修論のチューターに、修論の構成や文章の内容についてのフィードバックをいただいたり、フランス人の友達に添削をお願いしたりしたことで、無事に提出できました。悩んだときは一人で抱え込みすぎず周りの人に頼る大切さを改めて感じました。

4. 今後の課題、キャリア目標

NGO・NPO への就職を志望しています。今回の仏系 NGO でのインターンを通じて、草の根の国際協力に携わる仕事に就きたいという思いがさらに強まりました。大湖地域に対して、学術的な関心を継続的にもっているので、同地域で貧困問題や紛争解決の分野で活躍する NGO・NPO への就職し、海外駐在員のポストにつくことを目指しています。特にアフリカの土地問題の解決に関心があるため、長期的には同分野での活動実績がある International Land Coalition といった団体への就職を将来的に目指しています。コロナの流行もあり、日本への（一時）帰国のベストな時期がつかめていませんが、ボルドーを拠点に就活準備を進めていきます。今持っている就活ビザの期限が来年の 9 月上旬ぐらいまであるので、遅くてもそれまでには日本、フランス、アフリカで働くのか進路を決めたいと思っています。

5. 今後のロータリー活動への参加

ボルドーにはもう少し滞在する予定なので、コロナの状況を見てクラブ活動に参加できるか伺ってみようと考えています。帰国後は、推薦クラブへの訪問し、バーナーの寄贈を行い、留学の体験についてロータリアンの方々と共有したいと考えています。また学友会を通して、ロータリー活動及び学友同士の交流に関わっていけたらと思います。

6. 今後の奨学生への助言

自分の興味関心や、研究内容について軸を持っていると、留学中に役立つことがあるのではと思います。私の所属したコースでは、2 年目に最低 3 ヶ月以上のインターンをする必要がありました。海外でのインターン受け入れ先探しに加え、コロナ禍の影響でかなり苦戦しました。しかしながら、自分の興味関心の持っている分野であった土地問題に関係するインターンをしたいという軸を立てていたことで、最終的に自分の希望していた分野と地域での研究インターンを実施することができました。実際にインターンをした NGO 団体のアフリカ部、大湖地域のプロジェクトマネジャーである元上司は、選考の際に私が学部時代の卒論で、同地域にあるコンゴ民主共和国で長期化している紛争の原因について執筆していたことを評価してくださいました。

将来留学される奨学生の皆さんも、目的や学びたい内容などを持って留学に望まれることと思います。明確な目的や一貫性のある学術的関心が留学先でも生かすことができると思うので、学部時代の卒論やインターンを通じてそれを探求していくことをオススメします。それが実り多い留学生活にも繋がるのではと思います。

7. その他特記事項

11 月末に卒業した大学が開催したオンラインでの留学相談会・座談会に参加しました。これまでの留学やインターンの経験を後輩の皆さんに共有できたのは良い機会でした。フランス留学や英語圏以外の海外大学院に進学する生徒は少ないので、これからも機会を見つけて情報を発信し、交流を深めていけたらと思います。